座談会

国際コミュニケーション学と千代田学

【参加者】
根岸徹郎 | NEGISHI Tetsuro、フランス文学・文化、現代演劇、本学部長
今井ハイデ | IMAI Heide、文化地理、文化研究、都市計画、都市史と都市社会学
小林貴徳 | KOBAYASHI Takanori、文化人類学、民族学、ラテンアメリカ地域研究

日時:2022年11月4日(金)
場所:本学神田校舎10号館12階10121

1.国際コミュニケーション学部の特徴

小林……国際コミュニケーション学部が創設されて3年目を迎えています。今年[2022年] 9月より学部長に就かれた根岸さんから、この学部の特色というか、本学部の学びで目指したい方向性についてお話しいただけますか。

根岸……国際コミュニケーション学部には日本語学科と異文化コミュニケーション学科の2学科があるわけですが、特色はやはり何よりも「ことば」を土台としているという点でしょう。日本語学科は文字通り、日本語の研究と勉強をベースにしているわけですし、異文化コミュニケーション学科では英語と英語以外の外国語を必ず、しっかりと勉強する。つまり、ともに「ことば」がスタート地点となっています。さらに日本語学科は文学部から神田に移った際に、実践的な日本語をどう使うかということを前面に出すような工夫を始めています。「協力講座」などが、その取り組みの例です。もう一方の異文化コミュニケーション学科では、全員が海外に留学するカリキュラムを組むことで、実際に「ことば」が使われている現場で勉強することを重視しています。ここがもっともベースになるところだと思っています。

小林……なるほど、「ことば」は個人と個人、自己と他者を媒介するコミュニケーションのツールですが、本学部の学びの方向性という意味でも、学生たちにもっとも力をつけてほしい能力ですね。

根岸……そのとおりです。その上で、「コミュニケーション」という語が学部の名称についているのは、現代の社会では、やはり「ことば」を超えたコミュニケーションを視野にいれる必要があるからです。例えば異文化コミュニケーション学科では、「ことば」だけでなく、「身体」「映像」といった領域も積極的に取り入れたいと思っています。「ことば」を出発点として、「コミュニケーション」を最終的な目標とする。その先には、人と人がどのように接するのかというテーマが浮かび上がってきます。地域とか国家とか大きな枠組みとはまた別に、わたしたちが考えたいのは、人と人がどのように触れていくかということで、それが学部の研究教育の土台になると思います。そのために、日本語学科の学生たちも実践に富んだ授業を受けているし、異文化コミュニケーション学科の学生は実際に海外での研修に挑む。そして、触れるためにはじっと机の前に座っているわけにはいかない、つまり「移動」をする必要があるわけです。

小林……国際コミュニケーション学部の創設以来、パンデミックの影響をもろに受けてきました。学生たちもわれわれも、世の中のすべての人が「移動」を制限されました。その点に関していえば、コミュニケーションの形態や傾向も大きく変わってきたように思います。私たちも柔軟な対応を迫られました。

根岸……たしかに、新型コロナウイルス感染症のせいで「移動」は制限され、オンラインによるコミュニケーションが活発になってきたけれども、オンラインでできることと、オンラインではまだできないこと、オンラインでしたいと思うこと、オンラインではなくて実際に自分の身体を使って行なわなければいけないこと——そういった課題やテーマが、いろいろな分野のなかで次々に出てきていると強く感じます。こうした状況の変化のなかで、この学部の研究と教育の特徴というのは、人と人がどのように触れ合うことができるかという根本的な問題を考えることに行きつくのだと思います。そのうえで、改めて「ことば」と「コミュ

ニケーション」の関係を見据える必要があると思うのです。その意味では、日本語学科も異文化コミュニケーション学科も、道筋は異なるようでも、最終的には同じところをめざしていると思います。

小林……日本語学科と異文化コミュニケーション学科が車の両輪のように、本学部を推進しているということですね。最終的な目標を共有しつつですが、異なる道筋という点について少し説明いただけますか。

根岸……日本語学科と異文化コミュニケーション学科とではどこが違うのかといえば、キーワードの一つになるのは、「ローカル」の認識だとわたしは考えています。日本語はわたしたちがいまここで生活している場所で通用している、きわめて「ローカル」なものです。他方、グローバルというものを見据えたときに、このローカルとグローバルがどのような関係を持てるか、あるいは持つべきか、この点が今後の問題となる。とくに、さきほど挙げたようにオンラインが登場することで、グローバルが一見すると身近なものとなってきているように思えます。江戸から明治にかけての「開国」ではないけれど、ある意味で、これまでの世界の関係が大きく変化してきていて、ローカルのなかにグローバルが強引に入り込んでくるような状況になってきている。ここで気を付けないと、ローカルが受け身になりすぎて、グローバルに飲み込まれてしまうのではないかという危惧を感じています。その結果、「グローバル」という言葉の下で世界がとても単眼的で、平坦、等質なものになってしまいはしないか。ローカルとグローバルのあいだをどのように結び付けていくのか、これから国際コミュニケーション学部が取り組むべき研究の課題はこの点にあって、その成果を学生への教育に反映して、学生たちがそういう意識を持ちつつ、自分の課題に取り組んでいけるように進めるべきだと思います。

小林……たしかにご指摘のとおり、われわれを取り巻く環境、とりわけ情報通信技術の分野ではここ数年で日常生活が大きく変化しています。ICTやIoTの普及によって、私たちはつねにインターネットで人が人と、人がモノと、また、グローバルな情報とつながっている、グローバルな世界が身近になっているような気がします。

図1　右から今井ハイデ准教授、根岸徹郎教授、小林貴徳准教授

根岸……とはいえ、わたしたち教員は学生よりはいささか上の世代で、ここまでオンラインの状況になるとは、正直思っていませんでした。まずしっかりと文献を読むというのがわたしたちの世代の研究のスタイルで、そのために必要であれば海外に行くといったものだったけれども、いまは文献だってむこうに行かなくても読める。調べること自体はすごく楽になった。楽になりすぎている、といった方がいいでしょうか。もちろん調べることがベースとなることに違いはないですが、でも、「これだけ調べました」だけでは先に進めないわけで、調べたら何かできるか、調べた先に何が出てくるかということを、今まで以上に考えなければいけない、そういう時代になっていると思います。

そのときに一見すると逆説的ですが、「実際に触れる」ということ、自分の眼で見たり、自分の耳で聞いたり、手で触れたり、自分の足で歩いたりすること、つまり身体を使うことで、単なる情報の獲得以上の意味を持ってくることを期待しています。勉強を超えた「学び」というものを、若い人たちはどこかで身につけていかなければならないと思うし、重要になっていくのではないかと感じています。

たとえば、多様性、「ダイバーシティ」という語がよく聞かれるようになりました。多様性を情報だけで「多様性だよね」といって一律に片づけてしまわずに、「多様性とは何か」ということを感じ、考えてみる。人のことを見て「多様だ」というのは簡単ですが、自分もその多様性をつくっているということをまず実感しなければ、これからの多様性に対応できないとわたしは思います。また、先に挙げた「ローカル」ということばでいえば、「グローバル」は決して均一の世界ではなく、「ローカル」があることで、その先の「多様なグローバル」が見えてくるだろう。そういう思考を実践から獲得していく。この意味で、国際コミュニケーション学部が打ち出していく研究教育の特徴は「実践」にあります。実際に動いてみよう、ということが非常に重要になってくると思っています。しかも、それは何かの「役に立つ」からといった目的のためではなく、「考える」ための土台として、という意味を持ってくるわけです。ローカルとグローバルについては、「グローカル」という語も使われています。たしかに口当たりのよいことばで、現代社会におけるローカルとグローバルの関係に対して漠然としたイメージは抱きやすいものの、そう簡単に「グローカル」といえるものではないでしょう。このことばによって、ローカルとグローバルを均一化してまとめて捉えようとするのであれば、用心した方がいいと思います。

小林……本学部の研究教育の特徴の一つである「実践」という意味では、まさにこの東京を舞台に研究実践をされている今井ハイデさんにグローバルとローカルの関係性について伺いたいと思いますがいかがでしょうか。

今井ハイデ……確かにグローバルとローカルという点から「グローカル」ということがいわれることもあります。ただし、私はこの用語を用いません。日常生活の文脈でいえば、ローカルの問題はありますが、グローバルの問題を考えることはあまりありません。たとえば、九段下のあたりを歩いていて、グローバルな問題にじかに結びつけて何かを考えることがあるでしょうか？　たしかに、東京全体のことを考えればグローバルな問題にも結びつくでしょうが、ローカルはふだんの、普通の生活に包み込まれています。私たちの学生も日常的にグローバルを考えないでしょう。学生たちは大学に入ってコミュニケーションスキルを学びたいが、じっさいに日本社会ではどこでその能力を使うのでしょうか？　私が担当する授業では実践的なコミュニケーションスキルを求めますが、現実には使う場面が少ないです。たとえば、留学してスペイン語能力を高めたとしても、使わなければ忘れてしまう。どうやって使うかが問題です。グローバルの問題をもっと考えることと外国語のスキルを使うことはつながっているので、学生たちにはもっと外国語を使うようにしてほしいと考えます。毎朝テレビのニュースを見るとか、簡単なところからグローバルの事象に触れて外国語のスキルを使うこともできるわけです。

ふだんの生活はローカルで展開されているわけですが、それと同時に、グローバルな関係性を構築し、グローバル・シチズンとしての活動もできます。そうしたネットワークを駆使して活動することができればすばらしい。たしかに、学生たちは対面で授業を受けられない、留学ができないと嘆いています。ただし、

見方を変えれば、じつは今、私たちにとってすばらしいチャンスなのかもしれません。パンデミックによってオンラインの授業しかできなかったけれども、その経験をつうじて学生たちのレジリエンスは向上しました。ここで重要なのは、ローカルとグローバルのあいだを飛び越えることです。ローカルだけではレジリエンスは鍛えられないし、スキルを身につけることもできない。そこで飛び越えることによってグローバルのイメージをどんどん作り出していくのです。たとえば、メキシコを訪問してもAmikoo❖に行くだけではなくて、環境の問題や文化の問題などに関心を示し、意味を深堀りする探求心を育てることが大切です。

小林……なるほど、ローカルとグローバルのあいだを飛び越える意識ですね。その意味では、さきほど根岸さんがお話になった「ローカルがグローバルに飲み込まれてしまう」というところを、もう少し話していただけないでしょうか?

根岸……一つはグローバルがあまりにも身近になって、グローバルとしての重みがなくなってしまっている。日常生活の中にも簡単に入り込んでしまっていて、グローバルはグローバルとして考えなければいけないものがあるのに、それがあまりにも身近なように感じられすぎているのではないか、ということです。もう一つは、先ほど触れたように「グローバル」ということばが持つ包括的な力で、現代の世界を一つの均質なものとして理解させようとする力があまりに強いのではないか、という点です。この均質性というものが本当にあるのか、それはあくまでもヴァーチャルなものなのに、そのなかに入ったリアリティまでがヴァーチャルのようになってしまうという危険性です。国際コミュニケーション学部が土台とすべきだと述べた「実践」は、この危険からわたしたちが身を守る一つの道を示すことだとわたしは考えています。

小林……パンデミック以前というのは、ふだんの、ローカルな日常生活とグローバルな事象のあいだに一定の距離があったように思います。ところが、パンデミックによって、地球全体を覆う現象が同時進行で私たちの生活に入り込んできたわけです。イタリアで起きていることが、ブラジルでも進行し、それは東京でも同じでした。こうしたなかで大学教育もオンラインに移行し、日常生活も対面でのコミュニケーションの場は減り、外に出ることすらできなくなった。自宅に待機するしかなかったわけですが、インターネットをつうじて世界とはつながっていた。友達とも先生とも、隣近所とも顔を直接合わす機会はないが、SNSなどインターネットツールではつながっていたわけです。たぶん、「つながっている」という経験の仕方が大きく変わったのだと思うんですね。ローカルとのつながりが希薄になった一方で、インターネットを介したヴァーチャルでのつながりが多様化した。ヴァーチャルが日常を侵食したんです。

たとえば、最近メタバースというヴァーチャル空間でのサービスが拡大しています。ゲームだけではなく、お店で買い物をしたり、学会が開催されてみたり、ヴァーチャル空間で日常生活と同じように行動できる。トントンと歩いて行って、コンコンと研究室のドアを敲いて、指導教員と会って授業の相談を求めるような、ふだんのコミュニケーションをヴァーチャルで行なうことすらできるかもしれません。さまざまな国や地域、異なる言語の人のあいだのコミュニケーションを発展させるような、大きな可能性があるようです。けれども、その一方で学生は、リアルの重要さに改めて気付いているように感じます。学生たちの様子を見ていると、とくに対面形式に戻った今年度の授業がとても楽しいというのです。グループワークしたり、ディスカッションしたり、ディベートしたり、そういうことがものすごく刺激的だ、人の顔を見ながら話すのがこんなに楽しかったとは、という感想が聞かれます。

今井……実際にパンデミックはまだ終わっていないので、ヴァーチャルとリアルがどのようにしてグローバルとローカルに結びつくか、まだそれはわかりません。次は何が必要になるのでしょうか?　世界にはいろいろな問題があります。ウクライナのこととか、台湾のこととか、そういう問題について、私たちの学生が議論を深める授業を行なうこともできると思います。人類学や社会学の研究対象であるだけでなく、学生が自分で良きコミュニティを創出していくことが大切ではないでしょうか。外国人研究者のなかには、日本でビザが取れないために帰国して、日本人にオンラインでインタビューしながら研究を続けている人もいます。ローカルな小さな出来事がグローバルな

問題へと大きく振れていくバタフライ効果があります。学生もオンラインを駆使してそれを実現できるのです。行き詰まることもあるでしょう。しかし、チャンスは今日明日にもあるかもしれない。対面でのコミュニケーションに限られていた環境を考えると、この点はすごく大きな変化だと思います。

根岸……そうですね。たとえば学生が行ってきた留学にしても、ウクライナとロシアの戦争の影響で、ドイツまでそれまで11時間だったフライトが18時間かかるようになる。円安になって円の価値が下がって、それまでフランスでは1杯120円で飲めたコーヒーが150円になってくる。逆に来年は100円で飲めるかもしれない。こういう体験から、留学することで単なる「ことば」の習得以上に、わたしたちが世界のなかの経済とか政治とか戦争とかの影響を確実に受けているということを学生が感じ取ってほしい。単にローカルな経済レベルで「円が安いね」ではなくて、それによって自分たちの生活が変わってくる、そういうなかに自分たちがいる、ということを感じ取る感性を学生には体得してほしいと思います。学びは必ずしもポジティヴなもののなかからだけ得られるものではなく、ネガティヴと見えるもののなかにも学ぶことはたくさんあります。

校友会のホームカミングデーのアカデミック企画で、1年生で参加してくれた学生のひとりが、「日本がダメになって海外に逃げ出したとき、どこのことばが一番頼りになるか」を考えて言語を選択したと言っていましたが、この学生は外国に行く前にすでに世界と自分の関係に気づいているわけです。パンデミックやウクライナのことを話したのも彼だけだったし、そこに外国語が結びついているところに新しいセンスを感じました。

今井……今年度より「異文化交流ワークショップ」という科目がスタートしました。たとえばこの授業をヴァーチャルで進めることもできるでしょう。フランスに渡航する前に、現地で直面するだろう問題をトレーニングする。ウェブサイトとかインスタグラム、ツイッター、フェイスブックなどを使って、フランスの先生と毎週1回コミュニケーションするとか。こういうことは学生にはすぐにできます。

小林……さきほど今井ハイデさんが指摘したレジリエンス、これが今の学生を特徴づけていると思います。学生たちの日常生活は新型コロナウイルス感染症の拡大によって、ロックダウンとか、移動制限とか、海外研修の延期とか、そういったことに覆われました。大学に通学することはないけれども、アルバイトをする時間は増えた。ヴァーチャルの世界でのコミュニケーションは増加し、友人との接点の場もインスタグラムとかフェイスブックとかLINEになった。顔を見て話をするよりはメッセージで行なう方が得意だ。ところが、これは大人の勝手な見方で、学生たちはもっとしなやかにそれを結び付けています。まさにレジリエンスの発揮であって、ヴァーチャルとリアルを行き来したり、グローバルとローカルを行き来したりというのを、私たちが考えるよりもっと巧みに実践しているようですね。

今井……コミュニケーションのスタイルとかトピックについていえば、ローカルとグローバル、日本語学科と異文化コミュニケーション学科はそれぞれ異なるということになりますが、私は授業でいつもそれを切り替えています。というのは、日常と非日常、リアルとヴァーチャル、ローカルとグローバルなど、社会や組織の中では双方が一つの全体としてあるのですから、それに対応する能力、つまりスペシャリストであり、ジェネラリストであるような人材を育成しなければならないと思います。これから3年生や4年生は卒業論文に向かい、物事をより深く理解していかなければなりません。これは重要な課題です。

根岸……さきほど話題に出た「異文化交流ワークショップ」という授業では、いろいろなところに行っていた学生が自分の経験を話します。たとえばカナダに留学していた学生にとってスペインの話はある意味ではヴァーチャルということになります。けれども、その話をしている友人はリアルに経験して、その友人が自分のリアルに横にいるわけで、そういう話は単なる匿名のヴァーチャルなものとは異なる意味を持ってくる。ニュースで聞いたり本で読んだりしたのとは違う意味を帯びてきて、そこから学生同士のコミュニケーションも始まるし、カナダとスペインについての比較を通した見方が出てくる。そういう授業になるといいなと思います。

❖…メキシコ南部のリゾート地リヴィエラ・マヤに建設予定の総合テーマパーク

わたしからすれば、今の学生にはヴァーチャルな世界が強すぎるように感じられるから、こうした授業のありかたにヴァーチャルとリアルのバランスを図る働きが期待できるとも思うのです。また、逆に、話し手の側からすれば、自分のリアルな体験をどうすればリアリティを失うことなく伝えることができるかという点が課題になります。そこから、それぞれの「ローカル」のなかにある「グローバル」がリアリティを持って浮かび上がってくるのではないか、とも思います。

今井……私たちが取り組むゼミはグローバルとローカルだけではない。たとえばディスローカル、ノンローカル、トランスローカルという見かたがあり、それは同じようにディスグローバル、ノングローバル、トランスグローバルという見方もありうるわけです。そうすると、さまざまな観点から問題をとらえる必要が出てきます。

小林……本学部の学びで目指したい方向性についての展望は話が尽きませんが、ここでもうひとつの話題に移りたいと思います。

2.千代田学の狙い

小林……令和4年度［2022年度］、千代田学という事業提案制度に採択され、本学部ではこれまでさまざまな取り組みを進めています。研究代表者でもある根岸さんからこのプロジェクトについて少しお話しいただけますか。

根岸……千代田学というのは、千代田区にある教育機関が千代田区のことをいろいろな切り口で調査研究したり、そこに住む人と結びつきをはかったりするという、千代田区が行なっているプロジェクトです。本年度、わたしたちが提案した事業は「文化的多様性を持つ千代田区の国際性に関する調査研究」というタイトルで、副題に「千代田区における多文化・国際性という特徴をどのように生かしていくか」を添えました。

小林……毎年この制度には千代田区に位置する大学機関から多様なテーマの提案がされているようですが、本学部の特色、というか強みがどのように盛り込まれていますか。

根岸……このタイトルを考えるときに、「多文化」と「国際性」をどのように扱うかについて思いを巡らせました。「多文化」というのは、日本の各地からいろいろな文化が千代田区に集まっているけれども、それがイコール「国際性」ではない。もちろん、千代田区は歴史的にいえば、江戸城のお膝元であるばかりか、いろいろな文化施設が集まっています。ニコライ堂があったり、メキシコ大使館があったり、その意味では「国際性」が強いわけです。以前、フランス大使館もこの近くにあったのですが、それが発想のスタート地点でした。「多文化」と「国際性」をどのように一つのプロジェクトで表現するか、この大きな課題を念頭に据えつつ、プロジェクトが始動しました。

小林……その課題については、本学部が誇る教員のそれぞれの専門領域や得意分野から知恵を出し合い、工夫を凝らすことで、何かこう化学反応のような動きが生ずると期待されていたのでしょうか。

根岸……そうですね。たとえば、小林さんと井上さんの尽力でメキシコ大使館の協力が得られ、メキシコの文化的伝統「死者の日」を市民に紹介する、また、学生とともに実践するという講演会/展示会を実現することができました。私たちの学生がメキシコに国費留学しているということとも結びついています。こうした取り組みを継続するために、今わたしたちは来年度の千代田学事業にむけて申請を進めているところです。千代田区における多文化・国際性という特徴をどのように活用していくかという課題に対して、次期は「千代田区の町と人をめぐるフィールドワークとそのドキュメンタリー映像の制作」という副題を添えました。そこでは今井ハイデさんにフィールドワークを実施していただいたり、本学部客員教授である舩橋淳監督に映像制作を指導していただいたり、もう一歩踏み込んだ実践ができるだろうと期待しています。

小林……本学部が抱える人材を活用すると同時に、本学の学生たちにこの事業の主役として活躍してもらうということですね。コロナ禍で延期となっていた海外研修プログラムが今年度からスタートしましたし、学生たちがそれぞれの留学先で得た知識や培った経験を活かす場となるでしょうか。

根岸……わたしたちがこの事業の中心に据えたいのは学生です。学生たちが歩き、学生たちが調査し、学生たちが自分たちで考えるということをベースにしています。「国際性」という点では、グローバルとローカルの関わりという課題も扱えますし、「多文化」とい

図2: 学生がつくった「死者の祭壇」

う点では、ローカル領域が内包する文化の多様性にも切り込んでいくことができるかもしれない。とにかく、このプロジェクトの主意は発信をすることです。学生が得たものをどう発信するか、そこからわたしたち教員も学ぶところがあると確信しています。テクニカルな側面では、街歩きの方法論は今井ハイデさんに、映像製作の技術論は舩橋淳さんに指導していただくとしても、いざそれを使うのは学生たちです。たとえば彼らの感性でSNSによって発信してもいいわけです。

小林……千代田区を舞台とするプロジェクトの可能性や課題について、今井ハイデさんはどのような展望をお持ちでしょうか。これまでのフィールドワークでの経験や、あるいは日本社会での研究活動や日常生活で生じた関心などをお聞かせください。

今井……千代田学事業のプロジェクトでは、そうですね、100人とか200人を対象とするインタビューを実施したいと考えています。ある程度のサンプル数を集めることができれば、どのようなグローバルな問題が存在しているのか、また、それに対してローカルレベルでどのようなアプローチがあったのか理解する手がかりが得られるでしょう。インタビューのほとんどは日本人回答者になると思いますが、それでも、広島から来たとか、福岡から来たとか、それぞれ異なるローカル性を見出すことができます。他方、東京のなかといっても、ローカルな伝統的な文化が多く残っています。たとえば、その人たちの先祖はどこから来たのでしょう？　江戸時代からそこに住んでいたのでしょうか？　もしかすると、新たに到来し千代田区をつくったのかもしれないわけです。東京の人たちが食べている野菜はどこから来ているでしょうか？　2011年までは福島から届けられていたけれど、放射能の心配があるということで、そのあとは長野県松本市から来るようになった。その背景には、かつて東京に住んでいた人が松本に帰って農業を始めたからといわれています。そこに東京が孤立しているという問題を見てとることができます。つまり、一方では連環関係にあるけれども、他方では孤立しているという問題です。グローバルとローカルがこうした問題にどのように関わっているのか扱うこともできると思います。

根岸……そこで想定されているのは、ローカルのなかのローカルでは、とりわけ日本人同士であれば見えにくくなってしまう問題を、学生や外国人がインタビューをとおして可視化していくということですね。そして、それはグローバルとローカルの関係性について考えることになるということでしょうか。

今井……東京のなかのローカルの多様性も、どんな文脈で捉えるかがポイントです。たとえば、千代田区の人たちはみんな同じ言葉を話しているでしょうか？日本語といっても異なるイントネーションの人たちは、どんなローカルと結びついているのかという問いです。

根岸……今ご指摘にあったグローバルとローカルのあいだのグラデーションについては積極的に考えたい点です。私たち研究者はその見えにくくなったものを可視化していかなければならないと思います。これは、LGBTQの問題でもそうです。表面に出てこなければ考える対象にもならなかった。だからこそ、考えようとすることをまず可視化するという作業が大切でしょう。私が「身体で触れる」ことの重要さを強調するのは、表出した問題を自分の問題として考える必要があると思うからです。そのためにも「実体験」というのが、やはり必要ではないでしょうか。とはい

え、体験しなければ理解できない、ヴァーチャルな「体験」では意味がないと言いたいのではありません。

今井……私が町を歩くときカメラを持つこともありますが、何も持たないときもあります。スローペースで歩いて、においとか音とかにも注意を払います。また、朝と夜の違い、平日と週末の違い、リズムの差異も大切です。どんな商品が売られていて、それはどこで生産されていて、お客さんはどんな人かなども考えています。このように、対象ごとに方法論を考えて、研究を進めながらどのような方法論が適切なのか柔軟に考えています。

小林……本日の座談会は、千代田学という事業提案制度をつうじて私たち教員が学生たちとともに何ができるのかについてお話しいただきました。お二人の意見をうかがっていて共通しているのは、それは私も共有しますが、私たち自身の研究活動をベースとした方法論やテクニカルなものを、学生の感性やアイディアとしっかりと接合させて、かつ社会に発信していくことが屋台骨であるという点ですね。今年度の千代田学事業に携わって私が強く感じたのは、研究成果をアカデミックの領域に囲い込んでしまうのではなく、積極的に外へと橋渡ししていく意識の重要さです。その意味では、千代田学事業はとても良い動機づけだといえます。学部の創設すぐにパンデミックによって思うような取り組みができなかった。そのあいだ蓄積されたエネルギーの一部がこの千代田学事業をつうじて実現できるような気がしています。今後の展開がとても楽しみです。

根岸……そうですね、私も楽しみです。そういえば、本学の校歌は「宮城の北　枢地に立ちて　礎固し我等が大学」（高野辰之作歌）という詞で始まります。千代田の地に建つ専修大学から、国際コミュニケーション学部が官学民の連携で発信していく、いいですね。その実現のためには本学部の先生方と学生たちの深い連携が不可欠です。ぜひ、ご協力をお願いします。

［整理編集:小林貴徳、土屋昌明］

図3　10号館エントランスで展示配置を吟味する